

# 西藏譯華嚴經の第十一品

日 野 泰 道

西藏譯華嚴經は、漢譯では八十華嚴經に最も近い形體を有するものであるが、尙相當の増廣が見られる。かういふ異同箇處の吟味は、種々な形式があると傳へられる華嚴經の別な一本の形體を明にすることであり、それは華嚴經の成立問題の研究にも、華嚴思想の別な展開面を知る上にも重要なことである。

ここにその第十一品とは、その品題を *de bshin gyes pa phat po che* (如來華嚴品) と名け、谷大所藏北京版では華嚴部第一函 167 p-189b に互る部分でその第十三卷第十四卷を構成し、盧舍那品と名號品との間の部分に挿入せられてゐる (勘同目錄に別の品題を掲げるのは、北京版にて品末の題號を落してゐた爲である)。

以下、先づそのあらすぢを紹介して後、些か注意すべき點を指摘する。

先づ、經は初に世尊の住處を述べて、

「世尊は、佛身の形の如くなる智慧廣大海毘盧舍那如來手掌心中善住、須彌世界は梵天の身の形の如くなる普賢、三千大千世界は他化自在天の身の形の如くなる能持、二千世界は化樂天の身の形の如き同行、千世界は兜率天の身の形の如くなる普行、四州世界は夜摩天の身の形の如くなる住の最勝、州は三十三天の身の形の如き菩提幢、城は樓觀の形の如き無邊藏、草園は無憂菩提道場の形なる離

憂、樓觀は自性法性住世界の形なる普無可下に於て住したまへり」と標舉し、以下第十三卷全體にわたつて、これら住處の項目の一々について、その所依、名稱、形、眷屬、所具或は所住等、また、得名、功德等を細説し、更にさういふ智慧廣大海毘盧舍那如來の手掌心中に住する世界に、正にその智慧廣大海毘盧舍那如來が無盡の相あり無量の功德ある菩薩聲聞緣覺天人等に圍繞せられて師子座に處したまふと説かれてゐる。

次に第十四卷に入ると、この智慧廣大海毘盧舍那如來は一々の毛孔より十世界海微塵數の光明海を放ちたまふ。一々の光より十世界海微塵數の蓮華海に住する佛が生じ、その毛孔より十世界海微塵數の勸發の偈が生じて、あらゆる十方世界、あらゆる塵中世界の菩薩乃至人非人海を勸發する。勸發せられた十方の生類は各自の世界の佛の聽許を得てこの如來の所に往詣し供養讚嘆し法を聞く。

ときに東方十世界海微塵數の世界を過ぎ一切世界住心と名ける世界海に一切衆生利益海毘盧舍那如來と名くる佛在し、初にも終にも中程にも善き法を説きたまふ。この世界海を統治する轉輪聖王を多寶と名け、王子、王女、王妃各十世界海微塵數あり。この下約二枚半程がこれら王子等の徳の讚嘆に向けられる。

ときに、かが多寶轉輪王は、かの智慧廣大海毘盧舍那如來の勸發

の偈を聞き、自らの世界海の佛、一切衆生利益海毘盧舍那如來の所に至り、かの偈の所由を問ふ。かの佛、その偈が西方智慧廣大海毘盧舍那如來の威力に依るを教へたまふ。多寶王之を聞き「然らば、私もまたかの如來手掌心中善住世界海の智慧廣大海毘盧舍那如來の所に往き佛を供養し法を聞かんことを期す。」と申上げる。如來はこれに對し「汝、正にその時なりと思惟せば往くべし。されどかの世界海へは行くこと難し。如來の神力に依らずんば、たとへ十世界海微塵數の三昧に住する菩薩なりとも、そは容易ならず。されどここにその如くならざる賢勝邊境音と名くる世界海あり。汝、それを曾て見、或は聞きしことありや、又、そは何方の方向にあり、遠きや近きや、いかなる佛、現に在して法を説きたまふや、汝、これを知れりや。」と。多寶王これに答へて未だ聞けることすら無しと申すに如來は更に善く思念すべきことを勧められる。そこで王は圓入三昧海を初とせる十世界海微塵數の三昧海に入りて觀ずれども、その世界海の微標すらも見る事ができない。依て佛にその由申上げると如來、多寶王に宜ふには、「されば、かの如來手掌心中善住世界海へは、如來の神力に依るを除いては、十世界海微塵數の三昧に住する菩薩も、往き、佛を見奉り、法を聞くは易からずと知れ。」と。

そこで王は重ねて如來に教示を仰ぐと如來曰く、「大王よ、この世界の西方、廣大世界微塵數世界海を過ぎて賢勝邊境音と名くる世界海あり。かしこに一切行不相應方正成廣大海毘盧舍那如來在して法を説きたまふ。」と。如來かく宜へども、多寶王は知見せざる故思ふ様、「この世界海はかくも近きを見るを得ず。何ぞそれより遠きを見るを得ん。」と。多寶王がかくの如く自力の及ばざるを自覺するや否や、佛力に加持せられて一切無障礙三昧を始め、十世界海微塵

數の三昧に入る。その刹那に王は、かの賢勝邊境音世界海と一切行不相應方正成如來、如來手掌心中善住世界海と智慧廣大海毘盧舍那如來、その他十世界海微塵數の世界海の佛を、如來の智慧、普見の眼を以て掌中の菴摩羅果の如く明らかに見た。ときに多寶王はこれらの三昧より起ちて、如來にかの如來手掌心中善住世界海へ往かんことを請ひ、十世界海微塵數の菩薩、王子、並びにその眷屬等と共にかの世界へ往かんとして發趣する。そのとき、かの轉輪聖王の王妃、王女が之を知り、同じくかの世界海に往き、かの佛を見奉つて恭敬供養尊重をなし、かの如來より法を聞かんと思ふ由を王に告げて請ふ。そこで多寶王は彼女等に向つて次の如く答へることとなる。曰く、「たとへ汝等が佛を見るを願はず、法を聞くをば求めず、僧を尊重するをば願はず、佛の菩提を證するを求めず、……この境界より行かんと欲するなく、他の境界へ去らんと欲するなくとも、若し汝等が一切の佛と菩薩と聲聞と獨覺と法界に住して、貪にも離貪にも住せず、瞋にも慈にも住せず、邪智にも正智にも住せず、一切佛法を分別演義すとも法界より動ぜずとならば往くべきなり。」多寶王の王妃等への教説はこれにて終り、以後王妃等が聞いて得た利益が述べられる。すなはち彼女等は、一々の眼界に依て十世界海微塵數の佛地、耳界に依て菩薩地、鼻界に依て緣覺地、舌界に依て聲聞地、身界に依て波羅蜜、一一の意界に依て十世界海微塵數の行海に於て心を専らにして、所得の功德を偈頌にて讃へるのである。さて、以上がこの一品の大凡の綱格であるが、以下二三の注意せらるる點を指摘したい。

(1) 先づ品題の *de bshin gyes pa phal po che* は、西蔵傳華嚴

經が、その原名を *buddhāvataṃsaka* とし、譯し *sans rgyas phal po che* とし、點より類推し *tathāgataṃsaka* と還元し、又、如來華嚴品と譯語を與へるが適當と思はれる。尤も *avataṃsaka* (花嚴又ハ耳飾リ) *√tanis, to decorate* と *phal po che* (大衆、大衆、*phal pa = common; che ba = great*) はその原義を異にし、その點から華嚴經の經題についても種々の論議が交されてゐるから、今もいささかの不確實性なしとはせないが、ともかく西藏譯にてはこの品題と經の總題とは *de bshin gces pa* と *sans rgyas* を置換へただけの相異で、その意味は全同であるといつてもよい。それ故、この品題は又逆に華嚴經の經題の考證にも重要な一資料たり得る。(荻原文集四八五頁參照。但、名號品と誤認。)

(2) この品初頭の形式は、この品が前には單經として流通してゐた形跡を止める。すなはちそれは大華嚴に編入のとき六成就中の信開時の三を略したものであり、西藏譯華嚴經に於けるこの様な例は、如來興顯經、普賢所說經を編入する場合にも見られる。

(3) 品初に世尊と云はれる佛は智慧廣大海毘盧舍那如來であり、その住處は智慧廣大海毘盧舍那如來手掌心中善住と名けられる。華嚴經の立場は一般に寂滅道場始成正覺の釋迦佛に即した華藏の毘盧舍那佛の說法と解せられ、而も說佛經典と云はるる如く、佛には多く放光入定等あるのみで、その所説は佛力を承けた菩薩が之を説くのである。今は佛名も世界名も相異してゐるが、教主たる佛と説主たる菩薩との關係は、この品では、掌中世界の佛と東方の佛の關係で示されてゐる。すなはち智慧廣大海毘盧舍那如來には放光あるのみで說法なく、十世界海微塵數の世界海を過ぎた東方の世界海の佛がこの佛とその世界を開顯するのである。智慧廣大なる佛名は智體を

表し、東方の佛の名、一切衆生利益はその化用を示し、その二が同じく毘盧舍那と名けられてその一體性を表現してゐる如くである。

(4) そしてこの品では、如來の在ます世界が如來の手掌中にありと説かれるが、この表現は如來と世界の融即する華嚴經の佛身觀世界觀をよく表象せるものである。經は、その如來手掌心中善住世界海と名くる所以を説明して、「如來の掌中に微塵の藏心あり。その中に十世界海微塵數の識界あり。その上に、各十世界海微塵數なる法界、虛空界、火界、水界、地界次第して安住し、その上に十世界海微塵數の廣大なる花が生じて、その上にこの世界海安住するが故に」と云ふ。如來の攝化の土としての世界海は一面からすれば如來がその中心に在まして說法したまふのであり、他面からすればその世界海全體が如來の掌中に攝せられてその自在なる化用を蒙る。その手掌こそは又如來の智の動き出た識の具體的表現であり、その攝化の世界海こそ法界に依住して始めて成就せられるものである。

(5) 後の多寶王の說話の示す所は、王がこの世界海に至らんとして至り得ず、遂に自己の力の及ばざることを自覺して佛力を蒙り、この世界海等を明らかに見た。是れ即ち我執を離れた所に自然にかかると世界に至ることを得るを示すものであらう。そして、それが又、法界に住することでもあるので、王妃等の請に對して、二邊を離れて法界に入住すれば、自然にしてかの世界に行くべしと説かれる。

以上の吟味に依てこの一品が華嚴經の思想の要約として如來華嚴なる名の下に行はれてゐたであらうこと、又それが盧舍那品の一展開たる性格を有つものとしてその直後に編入せられたであらうこと等が大凡推定せられる。その他、世界海の佛身形についての細説、西方願生思想との關係等種々論及したい點はあるが今は略する。